

明石の史跡（62） 兵火②



〔月輪山来迎寺〕天台宗 在谷八木村 養老年中行基菩薩開基也 享保四年
マテ凡千年余ニ成

これは『地志播磨鑑』（平野庸脩編）に記された、来迎寺の関係記事である（同書242頁）。わずか1行余に過ぎない。これだけを見れば、平穏な寺運という印象を持ってしまふ。

寺伝によれば、「天正年中三木合戦のとき、羽柴秀吉の兵火にかかり、本尊は大般若経の中にかくされて難をさけられた」（『明石市史』下、850頁）とあるのを見れば、播磨の歴史の転換期に、なんらかの関わりをもっていたことがわかる。

三木落城の9日前の、天正8年（1580）1月8日の夜、三木の秀吉は、毛利・雑賀の軍勢が守備する、魚住城（来迎寺の西北西方約2.5キロ）を攻撃した（「反町文書」『兵庫県史史料編中世9』363頁）。ここは、前年の9月におこなわれた、三木城への兵糧米搬送の拠点となったところである。

魚住城の所在する魚住荘は、東は谷八木川、西は瀬戸川の範囲が考えられ（兵庫県の地名Ⅱ、122頁）、瀬戸川の河口部右岸にある金輪寺（真言宗、魚住町西岡）も、寺伝には、応仁の兵火につづいて、天正の虚乱により炎上したという（『明石市史』下、855頁）。荘域の東西において、兵火の寺伝が残されているというのは、魚住城をピンポイント攻撃したのではなく、荘内全域が、掃蕩作戦の対象になったことを物語っているのではなかろうか。

さらにいえば、荘域の北部に位置する遍照寺（魚住町長坂町）にも、別所方に味方したために、兵火に罹災したとの寺伝があるところからも、広範囲な軍事作戦の展開されたことが推察できよう。

日本歴史学会会員 茨木 一成

来迎寺

